

古事記神話の再話作品のテキストについて

— 黄泉の国訪問神話の場合 —

原 田 留 美

Study of depiction of rewritten works of Kojiki myth
— In the case of Yominokunihoumon —

Rumi Harada

要旨：

本稿の目的は、児童書『絵物語古事記』と絵本『国生みのはなし～イザナキとイザナミ～』の、黄泉の国訪問神話の文章表現を比較することで、『絵物語古事記』のテキストの特徴を明らかにし、就学前後の子どもたちが楽しめる作品の一つとして、当該書籍を扱える可能性を探ることにある。分析の結果、登場人物の心理や状況についてわかりやすい形でより詳しく描いていることが確認できた。古事記にはない説明や描写が加わった富安版は、物語の奥に一歩踏み込む楽しさが味わえる作品と評価するが、就学前後の子どもたちを楽しませる際には、単独の物語を取り出して扱うなどの配慮も必要と考える。

キーワード：

古事記 再話 黄泉の国訪問神話 富安陽子 荻原規子

I. はじめに

就学前後の子どもたちが古事記などの日本の神話に親しむ場合の作品というと、まず思い浮かぶのは絵本だろう。古事記神話の一部を切り取り短い物語として再話されている点や、物語世界の理解を支える絵の比重が大きいことは、集中力や理解力が発達途上である幼い子どもが物語世界を楽しむ際に助けとなろう¹⁾。

他方、小学校低学年から楽しめる児童書として刊行されている古事記神話の再話作品もある。2020年段階で、最も入手しやすいのは、『絵物語古事記』（偕成社 2017年）であろう。この作品は、児童文学者の富安陽子が文を、アニメーション作家でもある絵本作家の山村浩二が

絵を担当している。監修は古事記研究者の三浦佑之である。

この作品は、古事記上巻を再話したものになっており、後書きも含めたページ数は253に及ぶ。体裁は絵本のそれではなく、子どもが一人で読む場合には、相応の読書力が必要であろう。

しかし一方で、題名に「絵物語」がついていることにも示されているように、各ページの半分ほどに絵が配置されている。一般の児童書より、いわゆる幼年文学作品の作りに近い²⁾。

また、富安による朗読の動画がインターネットにより公開されていることから、この作品が読み聞かせ（朗読）を意識したものであることがうかがえる³⁾。動画は、全編を5回に分けて

収録したものとなるようである。このことから、小分けにしても楽しめる作りになっていることがわかる。これらのことから、教師などが単独の物語を読み聞かせたり、あるいは毎日少しずつ読み聞かせることで全編を楽しませたりするなどの工夫を行えば年長児にも楽しめる、わかりやすさを意識した作品である可能性があると考えられる。

筆者はすでに、『絵物語古事記』と絵本『国生みのはなし～イザナキとイザナミ～』（荻原規子文 斉藤隆夫絵 三浦佑之監修 小学館 2016年）の世界創世から黄泉の国訪問にかけての古事記神話再話作品を比較し、絵本の方が『絵物語古事記』よりも平易とは必ずしも言えないことを指摘したが、本稿はそれに引き続き、黄泉の国訪問の物語の文章表現（心情や情景の描写など）を比較することで、『絵物語古事記』のわかりやすさの工夫を明らかにすることをめざす⁴⁾。それにより、当該書籍が、就学前後の子どもが楽しめる作品の一つとして扱われる可能性を備えていることを明らかにすることを目的とする。

『絵物語古事記』と比較するのは、前回の論考に引き続き、『国生みのはなし～イザナキとイザナミ～』である。この絵本を選んだ理由は、出版年代が近く、かつ、監修者が両書とも三浦佑之であるため、再話の基盤となる古事記観が大きくは乖離していないことが期待でき、再話の工夫に焦点が当てやすいためである。

なお、本稿において、世界創世の部分を除いた理由であるが、世界創世の物語における両書の違いは、文章表現（描写の仕方）よりも、古事記神話に見られる要素の取り入れ方の違いの方が大きく、描写の仕方の差異を比較するには黄泉の国訪問の部分に限定した方が適切と考えるためである。

参考のために、古事記の黄泉国訪問神話の訓読文を以下に載せる⁵⁾。

是に、其の妹伊耶那美命を相見むと欲ひて、黄泉国に追ひ行きき。爾くして、殿より戸を膝ぢて出で向へし時に、伊耶那岐命の語りて詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、吾と汝と作れる国、未だ作り竟らず。故、還るべし」とのりたまひき。爾くして、伊耶那美命の答へて白さく、「悔しきかも、速く来ねば、吾は黄泉戸喫を為つ。然れども、愛しき我がなせの命の入り来坐せる事、恐きが故に、還らむと欲ふ。且く黄泉神と相論はむ。我を視ること莫れ」と、如此白して、其の殿の内に還り入る間、甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みづらに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、うじたかれころろきて、頭には大雷居り、胸には火雷居り、腹には黒雷居り、陰には析雷居り、左の手には若雷居り、右の手には土雷居り、左の足には鳴雷居り、右の足には伏雷居り、并せて八くさの雷の神、成り居りき。

是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、其の妹伊耶那美命の言はく、「吾に辱を見しめつ」といひて、即ち予母都志許売を遣はして、追はしめき。爾くして、伊耶那岐命、黒き御縵を取りて投げ棄つるに、乃ち蒲子生りき。是を撫ひ食む間に、逃げ行きき。猶追ひき。亦、其の右の御みづらに刺せる湯津々間櫛を引き闕きて投げ棄つるに、乃ち筍生りき。是を抜き食む間に、逃げ行きき。かつ、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。爾くして、御佩かしせる十拳の剣を

抜きて、後手にふきつつ、逃げ来つ。猶追ひき。黄泉つひら坂の坂本に到りし時に、その坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返りき。爾くして、伊耶那岐命、桃子に告らさく、「汝、吾を助けしが如く、葦原中国に所有る、うつしき青人草の、苦しき瀬に落ちて患へ惚む時に、助くべし」と告らし、名を賜ひて意富加牟豆美命と号けき。

最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追ひ来つ。爾くして、千引の石を其の黄泉つひら坂に引き塞ぎ、其の石を中に置き、各対き立ちて、事戸を度す時に、伊耶那美命の言ひしく、「愛しき我がなせの命、如此為ば、汝が国の人草を、一日に千頭絞り殺さむ。」といひき。爾くして、伊耶那岐命の詔ひしく、「愛しき我がなに妹の命、汝然為ば、吾一日に千五百の産屋を立てむ」とのりたまひき。是を以て、一日に必ず千

人死に、一日に必ず千五百人生るるぞ。故、其の伊耶那美神命を号けて黄泉津大神と謂ふ。亦云はく、其の追ひしきしを以て、道敷大神と号く。亦、其の黄泉坂を塞げる石は、道反之大神と号く。亦、塞り坐す黄泉戸大神と謂ふ。故、其の所謂る黄泉ひら坂は、今、出雲国の伊賦夜坂と謂ふ。

II. テキスト比較表について

『絵物語古事記』（以降、富安版と称す。）と『国生みのはなし～イザナキとイザナミ～』（以降、荻原版と称す。）のテキストを比較しやすくするため、表形式にまとめたものを下記に載せる。なお、比較のしやすさを優先するため、改行については必ずしも原文通りではない。ルビも省略した。下線部は筆者によるもので、比較の際に注目すべき点を記した。

表1 富安版と荻原版テキスト比較表

| 富安版 | 荻原版 |
|--|---|
| <p>まっ暗な坂をくだつて、黄泉の国にたどりついてみると、そこには大きな御殿がたっていた。 イザナキが、げんかんの戸をたたくと、入り口がわずかにひらいて、中から顔をのぞかせたのは、<u>なんと、死んでしまったはずのイザナミだった。</u> イザナキは、<u>うれしくて、うれしくて、ドキドキしながら、なつかしい妻に語りかけた。</u> 「ああ、いとしい妻よ、むかえにきたぞ。わたしたちの国づくりは、まだ、終わっていないじゃないか。さ、いっしょに帰って、また、国づくりをつづけよう。」 するとイザナミは、<u>悲しそうにため息をついて、こう言った。</u> 「ああ、いとしいあなた。もうすこし早く、きてくださればよかったのに……。」 じつは、イザナミは、黄泉の国の食べものを食べてしまっていたんだ。<u>死者の国のものを食べたら、もうもとの世界にはもどれない。それが、黄泉の国のきまりだった。</u> でも、イザナミだって、夫を恋しく思う気もちは、イ</p> | <p>黄泉の国でイザナミが住むごてんは、<u>戸をかたく閉めきって</u>ありました。 それでも、夫がはるばるたずねてきたことを知ると、戸口のすぐそばまで出てきました。 イザナキは、<u>とびらごしに</u>語りかけました。 「いとしいわが妻の君よ、わたしとおまえでつくった国は、まだすべてをつくり終えていない。だから、わたしとともに帰ろう。」 イザナミは、こたえて言いました。 「ああ、くやしい、もっと早く来てくださらなかったのが。わたくしは、すでに黄泉の食べものを食べてしまいました。けれども、いとしいわが夫の君がこんなところまで来てくださったこと、このままにできません。ともに帰りたいので、黄泉の神たちと話し合ってみます。しばらくかかるでしょうが、けっして、わたくしを見ようとしてはなりませんよ。」</p> |

イザナキとおんなじだ。だから、イザナミは夫にこう言った。

「せっかくあなたが、はるばるむかえにきてくださったのですから、なんとか、いっしょに帰る方法がないものか、黄泉の国の神さまたちに相談してみましよう。しばらく待っていてください。

でも、わたくしがもどるまで、けっして、御殿の中をのぞいてはいけませんよ。」

そう言うと、イザナキを外にのこして、イザナミは、真っ暗な御殿の中にはいって行ってしまった。

イザナキは、まった。妻がもどってくるのをまってまって、まちつづけた。でも、イザナミは、なかなかもどってこなかった。

いったい、どうしているのだろうかと心配になったイザナキは、自分の頭の左がわにさしていた、大きなくしをぬきとると、そのくしの歯の一本をポキンとおりとった。

そして、おったくしの歯に、こっそりと火をつけた。もえるくしの歯を小さなたいまつのようにかけ、イザナキは、そうとそうと、黄泉の御殿の中に足をふみ入れた。

けっしてのぞくな、と言われていた御殿の中を見たたん、イザナキはおどろきのあまり、こしをぬかしそうになった。

御殿の暗闇の中には、イザナミのしかばねがよこたわっていた。あの、美しく、いとしい妻のすがたはどこにもなくそこには、くさり、くちはて、うじのわいたむくろが、ころがっていた。

しかも、その体の上には、八体の雷神がうづくまって、ゴロゴロと雷の音をとどろかせているではないか。

あまりのおそろしさに、イザナキは、火をともしたくしの歯をなげすて、逃げ出した。

すると、暗闇のおくから声が聞こえてきた。

それは、いかりにもえるイザナミの声だった。

「よくも、よくも、わたくしに、はじをかかせましたね！けっして、見てはいけないと言ったのに！」

何か、闇のむこうからザワザワと、イザナキを追いかけてきた

イザナキが走りながら、ちらりとふりかえってみると、恐ろしい顔をした死者の国の女たちが、わらわらと追いかけてくるのが見えた。ヨモツシコメとよばれる、黄泉の国の使いたちだ。

イザナキは、黒いつる草の髪かざりを後ろになげつけた。

すると、そのとたん、髪かざりからつるがのび、葉がしげり、おいしそうな山ぶどうがどっさりとみのった。ヨモツシコメたちは、ぶどうのしげみにとびつき、む

イザナミはごてんのおくへ引き返し、イザナキは期待をかけて、じっと待っていました。

しかし、いつまでたっても妻はもどってきません。気をもみはじめ、とうとうしんぼうしきれなくなりま

す。とびらをこじ開けたイザナキは、左の角髪にさしたくしをぬき、歯を折って火をともしました。そして、真っ暗な中へ入って行きました。

くしの火が照らし出したのは、うじ虫が全身にたかり、むらがつてうごめく、イザナミの死体でした。

くさった頭、手足、むねやはらから、すさまじい雷の神がみが生まれ出ています。

なんとという変わりをはてたすがたでしょう。ひと目見てふるえあがったイザナキは、いっさんに逃げ出しました。

「わたくしに、はじをかかせたな。」

イザナミは、にげ帰るイザナキにいかりくるい、ヨモツシコメという黄泉の女たちに、追いかけると命じました。

ヨモツシコメは、強くおそろしい女たちです。たちまちイザナキに追いつきそうになりました。

イザナキは、頭にまいて髪かざりにしていたつる草をはずすと、うしろに投げすてました。

すると、つる草はたちまち大きなしげみに変わり、おいしそうな山ぶどうがどっさり実りました。

ヨモツシコメはこれを見のがせず、ぶどうの実をつん

しゃむしゃとあまい実を食べている。

「いまだ!」と、イザナキは、ずんずんにげた。

しかし、ヨモツシコメたちは、あつというまに、ぶどうを食べつくしてしまった。

そしてまた、イザナキのあとを、ものすごい速さで追いかけてきた。

イザナキは、こんどは、頭の右がわにさしていたくしをぬきとった。そして、そのくしの齒をボキボキとおりとって、ヨモツシコメめがけてなげつけた。

すると、地面におちたくしの齒から、つぎつぎに、たけのこがはえだした。

ヨモツシコメたちは、ゆくてをふさぐたけのこの林の中に立ちどまり、むしゃむしゃ、もりもり、たけのこを食べ始めた。どうやらもう、イザナキを追いかけることなんて、わすれてしまったみたいだ。

イザナキがはっと息をついたとき、また、黄泉の国の闇の中から、なにかがせまってくるけはいがした。

ゴロゴロゴロと、ぶきみな音がひびく。

ザクザクザクと、足音が聞こえる。

それは、いざなみのしかばねにむらがっていた、あの八体の雷神たちだった。雷神たちが千五百もの黄泉の国の軍勢をひきつれ、イザナキを追いかけてきたんだ。イザナキは、こしの剣をすらりとぬきはなった。その剣を後ろ手にふりながら、ひしに走っていくと、やっつと、黄泉の国のはずれの坂が見えてきた。黄泉比良坂とよばれる坂だ。あの坂をのぼれば、もとの世界に帰れるのだ。

しかし、追っ手たちはもう、すぐ後ろにせまっていた。イザナキは、坂のふもとにはえる大きな桃の木のかげに身をかくした。そして、桃の実を三つもぎとると、息をひそめて、せまってくる追っ手をまちかまえた。ザワザワザワと追っ手たちが坂の下に押しよせてくる。

「えいっ!」

その追っ手めがけて、イザナキは桃の実を力いっぱいなげつけた。

すると、どうだろう。

黄泉の国の軍勢は、みんなたちまち、にげていってしまったんだ。

イザナキは、桃の実の力に感心して、こう言った。「おまえに、オオオカムヅミという神の名をあたえよう。いま、わたしを助けたように、もし、人々がつらいめにあってくるしんでいたら、たすけてやっておくれ。」

やっつと追っ手がいなくなり、イザナキは、黄泉比良坂をいそいでのぼりはじめた。

しかし、坂のとちゅうで死者の国をふりかえったイザナキは、はっと息をのんだ。自分を追いかけてくるイザナミのすがたが後ろにせまっていたからだ。

で食べることに夢中になりました。

そのすきに、イザナキはにげのびました。

しかし、すぐにおどろくを食べつくしたヨモツシコメは、またもやイザナキにぐんぐんせまります。

あぶなくなったイザナキは、右の角髪のかしをぬき、齒を折ってうしろに投げずてました。

すると、おいしそうな竹の子がたくさん生えてきました。

ヨモツシコメはこれを見のがせず、竹の子をぬき取ってかじりつき、夢中になりました。

イザナキは今度も逃げのびました。

ますますおこったイザナミは、雷の神がみに千五百の黄泉の軍隊をつけ、イザナキを追わせました。

イザナキもこしのつるぎをぬき、うしろ手にふりまわしながらにげつづけました。

そして、ようやく、地上とのさかいにある、黄泉つ比良坂のふもとにたどりつきます。

ふもとには、ももの木が生えていました。

イザナキが、もも実をもぎ取って、次つぎに三つ投げつけると、追ってきたすべての者が、たちまちにげもどってしまいました。

イザナキは、ももの実をたたえて言いました。「わたしを助けてくれたように、地上の人びとが苦しい目におちいてなやむときは、いつでもおまえが助けてくれ。」

このももには、特別にオオオカムヅミと名をあたえました。

ついに、おこったイザナミがみずからあとを追いかけてきました。

それを見たイザナキは、千人がかりでやっとうごくほどの巨大な岩を黄泉比良坂のなかほどに引き据えて、黄泉の国への道をふさいでしまった。

イザナキ・イザナミの夫婦の神さまは、岩をはさんでむかいあった。

「いとしい、わたしの夫よ。あなたがこんなことをなさるのなら、わたしはこれから、あなたの国の人々を、一日に千人しめ殺しましょう。」とイザナミが言った。

「いとしい、わが妻よ。それなら私は、赤ちゃんの生まれる産屋を、この国に一日、千五百ずつたてよう。」と、イザナキが言った。

このときから、この国では、一日に千人が死に、一日に千五百人が生まれるようになったというわけだ。

イザナミは、黄泉の国の大神、ヨモツオオカミになった。黄泉比良坂をふさいだ岩は、黄泉戸大神とよばれ、この黄泉比良坂は、出雲の国の伊賦夜坂という坂のことだと言われている。

イザナキは、黄泉つ比良坂を千引の大岩でふさぎ、これ以上追ってこれないようにします。

そして、大岩をはさんでイザナミと向かい合い、離婚を言いわたしたのです。

このとき、妻のイザナミは言いました。

「いとしいわが夫の君、あなたが縁を切るなら、わたくしは地上の人びとを一日に千人くびり殺しますよ。」イザナキは言い返しました。

「いとしいわが妻の君。おまえがそうしたら、わたしは一日に千五百の産屋を建て、人の子が生まれるようにするよ。」

そのため、人間は、一日にかならず千人死に、一日に必ず千五百人生まれるようになったのです。

これによってイザナミは、ヨモツオオカミの名をもつようになりました。

Ⅲ. 心情や状況の描写等の違いについて

富安版と萩原版を比較するに、次のようなところに違いが認められると考える。

- ①登場人物の心情描写
 - ②古事記神話の世界の決まり事などについての説明
 - ③黄泉の国の住人の描写
 - ④大軍勢に追われる危機的場面の描写
 - ⑤オノマトペの使用頻度
- 以下、具体的に違いを指摘していく。

(1) 登場人物の心情描写の違い。

①イザナキとイザナミが、黄泉の国で再会する場面

この場面では、萩原版は、次のように戸が固く閉まっていたことを伝え、黄泉国が地上のものを温かく受け入れる場所ではないことを暗に示している。

黄泉の国でイザナミが住むごてんは、戸

をかたく閉めきってありました。

それでも、夫がはるばるたずねてきたことを知ると、戸口のすぐそばまで出てきました。

これに対して富安版は次のように表現している。

中から顔をのぞかせたのは、なんと、死んでしまったはずのイザナミだった。

イザナキは、うれしくて、うれしくて、ドキドキしながら、なつかしい妻に語りかけた。

思いがけなくも、愛しい妻との再会がすんなりと果たせたイザナキの喜びを表現している。

また両書のこのような違いは、富安版ではイザナミが顔をのぞかせているのに対して、萩原版は扉越しのやりとりに終始している点にも見える。

さらに、同場面でのイザナミの様子にも違いが見える。富安版では、イザナミが悲しんでいる様が表現されている。

するとイザナミは、悲しそうにため息をついて、こう言った。

「ああ、いとしいあなた。もうすこし早く、きてくださればよかったのに……。」

一方荻原版は、「ああ、くやしい、もっと早く来てくださらなかったのが。」という台詞にイザナミの悔しい気持ちが示されているが、悲しんだそぶりを説明する地の文はない。これは、古事記の記述「悔しきかも、速く来ねば…」により近い表現といえる。

②イザナミを待ちきれなくなったイザナキが、見るなの禁忌を破る場面

長い時間待たされ、しびれを切らしたイザナキが、イザナミとの約束を破るに至った経過を、荻原版は次のように表現している。

イザナミはごてんのおくへ引き返し、イザナキは期待をかけて、じっと待っていました。

しかし、いつまでたっても妻はもどってきません。

気をもみはじめ、とうとうしんぼうしきれなくなります。

とびらをこじ開けたイザナキは、左の角髪にさしたくしをぬき、歯を折って火をともしました。

そして、真っ暗な中へ入って行きました。

荻原版は、待ちきれなくなって扉をこじ開け、櫛の歯に火をともし建物の中に入った経過について、行動の描写を中心に述べている。古事記の「甚久しくして、待つこと難し。故、左の御みづらに刺せる湯津々間櫛の男柱を一箇取り闕きて、一つ火を燭して入り見し時に、…」

に近い表現といえる。

これに対して、富安版は次のようになっている。

まってまって、まちつづけた。でも、イザナミは、なかなかもどってこなかった。

いったいどうしているのだろうと心配になったイザナキは、自分の頭の左がわにさしていた、大きなくしをぬきとると、そのくしの歯の一本をポキンとおりとった。

そして、おったくしの歯に、こっそりと火をつけた。もえるくしの歯を小さなたいまつのかかげ、イザナキは、そうっとそうっと、黄泉の御殿の中に足をふみいれた。

待たされたイザナキが心配になったこと、そして、火をこっそりとつけたこと、さらに「そうっとそうっと」黄泉の御殿の中に足をふみいれたことが描かれている。この表現からは、イザナキが、イザナミとの約束を意識しつつも不安に駆られて破るにいたったことが、その心情とともに読み取れる。

③変わり果てたイザナミの姿に驚いたイザナキが逃げ出す場面

荻原版は、変わり果てたイザナミの姿の描写に続き、次のようになっている。

なんという変わりはてたすがたでしょう。ひと目見てふるえあがったイザナキは、いっさんに逃げ出しました。

この展開は、古事記の「是に、伊耶那岐命、見畏みて逃げ還る時に、…」に近い。

一方富安版は、まず、次のようになっている。

けっしてのぞくな、と言われていた御殿の中を見たとき、イザナキはおどろきのあまり、こしをぬかしそうになった。

そして、右の文に続き、変わり果てたイザナミの姿を伝えた後に、次のようにある。

あまりのおそろしさに、イザナキは、火をともしたくしの歯をなげすて、逃げ出した。

富安版の方が、イザナキの驚愕、恐怖についての描写が多い。

以上、登場人物の心情描写の違いが認められるところについて見てきたが、登場人物の心の動きに注目して物語を楽しもうとする場合には、心情描写に詳しい富安版が向いているといえよう。

(2) 古事記神話の世界の決まり事の説明について

黄泉の国訪問神話では、死者の国である黄泉の国で飲食をした者は地上世界に帰れない、という決まり事が重要なモチーフになっている。この決まり事の説明の仕方にも、両書で違いが見える。

荻原版は、次のようになっている。

「ああ、くやしい、もっと早く来てくださらなかったのが。わたくしは、すでに黄泉の食べものを食べてしまいました。けれども、いとしいわが夫の君がこんなところまで来てくださったこと、このままにできません。ともに帰りたいので、黄泉の神たちと話し合ってみます。しばらくかかるでしょうが、けっして、わたくしを見ようと

してはなりませんよ。」

イザナミの台詞の中で説明がなされているが、この形は古事記と共通している。

一方富安版は、次のようになっている。

「ああ、いとしいあなた。もうすこし早く、きてくださればよかったのに……。」

じつは、イザナミは、黄泉の国の食べものを食べてしまっていたんだ。死者の国のものを食べたら、もうもとの世界にはもどれない。それが、黄泉の国のきまりだった。

でも、イザナミだって、夫を恋しく思う気もちは、イザナキとおんなじだ。だから、イザナミは夫にこう言った。

「せつかくあなたが、はるばるむかえにきてくださったのですから、なんとか、いっしょに帰る方法がないものか、黄泉の国の神さまたちに相談してみましよう。しばらく待っていてください。でも、わたくしがもどるまで、けっして、御殿の中をのぞいてはいけませんよ。」

決まり事について、地の文で説明がなされている。この部分では、黄泉の国の決まり事のほか、イザナキの来訪が遅かったことを残念に思う気持ち、対応策を模索して地上世界に帰りたい思いなどイザナミの心情も描かれているが、決まり事を地の文に移すことにより、決まり事とイザナミの心情がそれぞれ際立ち、より強く印象づけられることになっていると考える。メリハリのついた表現になっているといえよう。

(3) 黄泉の国の住人の描写について

①イザナミの変り果てた姿の描写

黄泉の国訪問神話の中でも、強い印象をあた

える部分だが、萩原版は次のように描いている。

くしの火が照らし出したのは、うじ虫が全身にたかり、むらがつてうごめく、イザナミの死体でした。

くさった頭、手足、むねやはらから、すさまじい雷の神がみが生まれ出ています。

なんという変わりをはてたすがたでしょう。

簡潔な文体だが、虫に食まれる死体の様が印象に残る。死体から生まれ出た雷神については、「すさまじい」の語に集約されており、その具体像は描かれていない。

虫の描写については、古事記に「うじたかれころろきて」とあるのを受けての描写と言える。一方、富安版の方は、次のように描いている。

御殿の暗闇の中には、イザナミのしかばねがよこたわっていた。あの、美しく、いとしい妻のすがたはどこにもなくそこには、くさり、くちはて、うじのわいたむくろが、ころがっていた。

しかも、その体の上には、八体の雷神がうずくまって、ゴロゴロと雷の音をとどろかせているではないか。

生前のイザナミとは大きく変わった姿であることを伝えているが、虫については「うじのわいた」と簡潔に述べるにとどめている。そして、文末を「むくろがころがっていた」とすることで、腐敗の具体的な様子よりも、放置された死体の痛ましさが伝わる表現になっている。さらに、雷神の様を具体的に描くことで、死体の様子よりも雷神の方に焦点が当たりやすい描き方となっているともいえるだろう。

なお、雷神については古事記では、イザナミ

の体の各部位に様々な雷神がとりついており、合計八種の雷神が成ったことを伝えている。「八体の雷神」としている富安版に接点を認めることができるが、雷神の具体的な描写については富安版独自の描写である。

「うじたかれころろきて」という表現は、古事記神話の中でも強い印象を与える言葉であるが、富安版は、その意を伝えつつも、子ども読者にとって刺激的になりすぎない表現を工夫していると捉えられよう。

②追っ手の描写について

イザナミの変わり果てた姿に驚いて逃げるイザナミに、次々と追っ手が送られてくる。まずはヨモツシコメ、次に八体の雷神率いる黄泉の軍勢、最後にイザナミ自身が追いかけてくる。それらの場面を抜き書きして引用する。

まずは萩原版から。

「わたくしに、はじをかかせたな。」

イザナミは、にげ帰るイザナキにいきりくるい、ヨモツシコメという黄泉の女たちに、追いかけると命じました。

ヨモツシコメは、強くおそろしい女たちです。

(中略)

ますますおこったイザナミは、雷の神がみに千五百の黄泉の軍隊をつけ、イザナキを追わせました。

(中略)

ついに、おこったイザナミがみずから、あとを追いかけてきました。

次に富安版を引用する。

すると、暗闇のおくから声が聞こえてき

た。

それは、いかりにもえるイザナミの声だった。

「よくも、よくも、わたくしに、はじをかかせましたね！ けっして、見てはいけないと言ったのに！」

何か、闇のむこうからザワザワと、イザナキを追いかけてきた。

イザナキが走りながら、ちらりとふりかえてみると、恐ろしい顔をした死者の国の女たちが、わらわらと追いかけてくるのが見えた。ヨモツシコメとよばれる、黄泉の国の使いたちだ。

(中略)

イザナキがほっと息をついたとき、また、黄泉の国の闇の中から、なにかがせまってくるけはいがした。

ゴロゴロゴロと、ぶきみな音がひびく。

ザクザクザクと、足音が聞こえる。

それは、いぎなみのしかばねにむらがつていた、あの八体の雷神たちだった。

(中略)

やっと追っ手がいなくなり、イザナキは、黄泉比良坂をいそいでのぼりはじめた。

しかし、坂のとちゅうで死者の国をふりかえったイザナキは、ほっと息をのんだ。自分を追いかけてくるイザナミのすがたが後ろにせまっていたからだ。

萩原版では、イザナミの怒っていることを伝えつつも、次々に追っ手がかかったことについて簡潔に述べている。萩原版の描き方は、それぞれ古事記の表現「即ち予母都志許売を遣はして、追はしめき。」「且、後には、其の八くさの雷の神に、千五百の黄泉軍を副へて追はしめき。」「最も後に、其の妹伊耶那美命、身自ら追

ひ来つ。」に近いものといえる。

一方富安版は、「暗闇のおくから」「闇のむこうから」「闇の中から」、追っ手の声や音が聞こえてきたり、気配が近づいてきたりなど、視覚では捉えられない恐ろしい何かに追われている描写が繰り返されている。また、「恐ろしい顔をした死者の国の女たちが、わらわらと追いかけてくるのが見えた。」「なにかがせまってくるけはいがした。」「坂のとちゅうで死者の国をふりかえったイザナキは、ほっと息をのんだ」など、イザナキの視点からの表現が織り込まれていることで、強い緊迫感が伝わる。さらに、追っ手の様子や迫りつつあることの描写も見える。富安版は、様々工夫を施した詳しい描写により、よりスリリングに表現している。

(4) 大軍勢に追われる危機的場面の描写について

黄泉の国から逃げ出したイザナミにとって、最大の危機的場面は、雷神たちが率いる大軍勢に追われている場面であろう。すでに、櫛や蔓草の髪飾り、剣などの呪具は使い終わっている。新たな武器、桃の実（魔除けの力を持つ果物）を効果的に使うしか、逃れるすべはない。

この場面では、萩原版は次のように表現している。

そして、ようやく、地上とのさかいにある、黄泉つ比良坂のふもとにたどりつきます。

ふもとは、ももの木が生えていました。

イザナキが、もも実をもぎ取って、次つぎに三つ投げつけると、追ってきたすべての者が、たちまちにげもどってしまいました。

シンプルな表現である。ここもまた、古事記の表現「黄泉ひら坂の坂本に到りし時に、其の坂本に在る桃子を三箇取りて待ち撃ちしかば、悉く坂を返り岐き。」をほぼ踏まえている。

ただ、この場面では「待ち撃ちしかば」が問題になる。最古の写本、真福寺本では「持撃」となっているが、新編日本古典文学全集版の古事記は、「待撃」とし、頭注にて「『記』で「撃つ」という時、相手を撃滅することであり、ここでは投げつけるのとは違うとみられる。後で桃の実に名を与えているのだから、ただの物体とは違う。投げつけたりする物ではなく、桃が呪力を発揮して助けるのである。この点で「待ち撃つ」は適切ではない。」と述べている。そして、口語訳では「迎え撃つ」としている⁶⁾。

他方、三浦佑之は、「待ち受けて投げつけた」としている⁷⁾。

この部分について、富安版は次のように描いている。

やっと、黄泉の国のはずれの坂が見えてきた。黄泉比良坂とよばれる坂だ。あの坂をのほれば、もとの世界に帰れるのだ。

しかし、追っ手たちはもう、すぐ後ろにせまっていた。

イザナキは、坂のふもとにはえる大きな桃の木のかげに身をかくした。そして、桃の実を三つもぎとると、息をひそめて、せまってくる追っ手をまちかまえた。

ザワザワザワと追っ手たちが坂の下に押しよせてくる。

「えいっ！」

その追っ手めがけて、イザナキは桃の実を力いっぱい投げつけた。

すると、どうだろう。

黄泉の国の軍勢は、みんなたちまち、に

げていってしまったんだ。

木の陰に隠れ、息をひそめて待ち構え、タイミングを見計らって桃の実を投げつけている。三浦による口語訳「待ち受けて投げつけた」を詳しく描写していると読める。

この部分をどう解釈するかということも関わっている描き方であるが、古事記の表現に沿った簡潔な荻原版に比し、富安版はここでも描写が詳しいといえよう。

(5) オノマトペの使用頻度について

表1でも明らかだが、富安版はオノマトペの使用頻度が荻原版に比して高い。

「ドキドキ」「ポキン」「ゴロゴロ」「ザワザワ」「むしゃむしゃ」「ずんずん」「ザクザクザク」「ザワザワザワ」など、いくつも拾うことができる。

荻原版は「ぐんぐん」くらいのものである。

オノマトペは、幼児語との関わりも指摘されており、語彙力に限度がある幼い子どもたちにとってわかりやすく使いやすい言葉といえるが、頻度の多さから考えるに富安版のオノマトペは、意図せずして結果的に多くなったというものというよりは、場面の様子をよりわかりやすくするために用いられたものであろう⁸⁾。

IV. まとめ

以上、富安版と荻原版の、黄泉の国訪問神話の文章表現を比較してきたが、古事記の表現を踏まえ、簡潔な文章で再話している荻原版に対し、富安版は、登場人物の心理や状況について、より詳しく描いていることが確認できた。Ⅲで触れたことのほかにも、黄泉の国で火をともし場面で「もえるくしの菌を小さなたいまつよ

うにかかげ」と表現したり、櫛の齒から生えたたけのこをむさぼり食うヨモツシコメたちについて「どうやらもう、イザナキを追いかけることなんて、わすれてしまったみたいだ。」などと説明したりするなど、細かい描写や説明の箇所が散見される。

Iで紹介した訓読文からもわかるように、古事記の文章は簡潔である。心情や情景、状況についての詳しい描写や説明に筆を割くという傾向は認めがたい。ゆえに、古事記の文章に沿うことを意識した再話の場合には、必然的に表現がシンプルになる。読者は、出来事の展開を追いつながりながら物語を楽しむことになるだろう。

一方で、登場人物の気持ちや物語世界の細部に目が向く読者が、出来事の描写中心の展開に対して、飽き足りない思いや疑問等をもつことも予想される。オノマトペなどを活用しながら、古事記にはない心情描写や状況描写に平易な表現をもって筆を割く富安版は、そういうニーズに応えうるわかりやすさを備えているといえよう。登場人物の気持ちや物語世界の細部の描写を楽しみたい読者は、富安版を通して、古事記神話の世界の奥に一步踏み込むかのような楽しさが味わえるのではないかと。

ただし、心情や状況についての描写が加わるということは、作品中の情報量が増えるということでもある。読者（読み聞かせの場合は聞き手）は、より多くの情報を処理しながら作品に接することになる。

本稿の冒頭で触れた、富安陽子による朗読映像では、黄泉の国訪問神話の部分については7分半ほどの時間がかかっている。就学前後の子どもたちに情報量の多い富安版を楽しませる場合には、一つ一つの物語を区切りとして扱うなどの配慮が必要と考える。

なお、繰り返し延べてきたことだが、同じ神

話を再話しているものの、萩原版と富安版の特徴にはかなりの違いがある。しかしこれは、それぞれの個性が異なることを指摘したまでであり、両書の間には質やレベルの差があると言っているわけではない。

子どもたちの興味関心やねらい（古い説話らしい雰囲気の世界を楽しませたいか、登場人物の心情等も味わわせたいか等）を踏まえて適宜使い分けることで、就学前後の子どもたちと古事記神話との出会いが、より豊かになるのではないかと。

保育者や教師など、子どもと本の仲立ちを担う大人には、それぞれの特徴を理解した上で、より望ましい読書環境を構成することが求められると考えるものである。

注

- 1) 読み聞かせ用書籍として編集された物語集のなかにも、古事記神話の再話作品を収載するものがあるが、質に問題があるケースが散見されるため、ここでは取り上げない。
原田留美、2017年、古事記神話の幼年向け再話の研究、おうふう
- 2) 幼年文学という語は学術用語としては未だ熟してはおらず、定義に曖昧なところがあるが、ここでは、絵本からいわゆる児童文学への過渡期に楽しむ、就学前後の子どもたちを対象とした作品群としておく。絵の比重は、絵本よりは低いが一般の児童書よりも高い。
林美千代、1999年、幼年文学—私たちの課題、日本児童文学、日本児童文学 45 (1)、6-14
米川泉子、2013年、絵本と児童文学のはざまにある幼年童話を考える、聖霊女子短期大学紀要、41 (0)、81-91
原田留美、2013年、〈自分〉を見つめ、他者を見つめる文学、子どもの思いをすくいあげる作品、日本児童文学、59 (2)、48-51
棚橋美代子・幼年文学選書の会編、1999年、子どもと楽しむはじめての文学、創元社
- 3) 『絵物語古事記』の監修者である三浦は、古事記

の成立と伝承に語り部のような存在が関わっていたのではないかとする説を提示している。再話者による朗読動画の作成公開は、そのような三浦の古事記観と関わる企画であるのかもしれない。

三浦佑之、2003年、古事記の世界（解説）、口語訳古事記完全版、文藝春秋、359-394

三浦佑之、2007年、古事記のひみつ 歴史書の成立、吉川弘文館

富安陽子、作者がよむ『絵物語 古事記』① by 富安陽子

https://www.youtube.com/watch?v=_N5GysOwnYc (2020年11月8日閲覧)

- 4) 原田留美、2020年、古事記神話の子ども向け再話について—世界創世神話と黄泉国訪問神話の場合一、文学・語学、第229号、131-132

なお、これは、2020年度夏季の全国大学国語国文学会にて口頭発表を行ったものとして認定された研究の要旨である。感染症流行により、全国大会は中止になった。

- 5) テキストは、新編日本古典文学全集『古事記』を用いた。

- 6) 注5) 47ページ

- 7) 三浦佑之、2003年、口語訳古事記完全版、文藝春秋、28

- 8) 窪菌晴夫、2017年、どうして赤ちゃん言葉とオノマトペは似ているの？、窪菌晴夫編、オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで—、岩波書店、121-142

参考文献一覧

富安陽子文・山村浩二絵・三浦佑之監修、2017年、絵物語古事記、偕成社

荻原規子文・斉藤隆夫絵・三浦佑之監修、2016年、国生みのはなし～イザナキとイザナミ～、小学館

山口佳紀・神野志隆光校注、1997年、新編日本古典文学全集古事記、小学館

棚橋美代子・幼年文学選書の会編、1999年、こどもと楽しむはじめての文学、創元社

三浦佑之、2003年、口語訳古事記完全版、文藝春秋

三浦佑之、2007年、古事記のひみつ 歴史書の成立、吉川弘文館

原田留美、2017年、古事記神話の幼年向け再話の研究、おうふう

窪菌晴夫編、2017年、オノマトペの謎—ピカチュウからモフモフまで—、岩波書店

林美千代、1999年、幼年文学—私たちの課題、日本児童文学、日本児童文学 45 (1)、6-14

米川泉子、2013年、絵本と児童文学のはざまにある幼年童話を考える、聖霊女子短期大学紀要、41 (0)、81-91

原田留美、2013年、〈自分〉を見つめ、他者を見つめる文学、子どもの思いをすくいあげる作品、日本児童文学、59 (2)、48-51

富安陽子、作者がよむ『絵物語 古事記』① by 富安陽子

https://www.youtube.com/watch?v=_N5GysOwnYc (2020年11月8日閲覧)

- 原田留美、2020年、古事記神話の子ども向け再話について—世界創世神話と黄泉国訪問神話の場合一、文学・語学、第229号、131-132